日本文学全集
30

石坂洋次郎

若い人(全)・海を見に行く
草を刈る娘・霧の中の少女

河出書房

石坂洋次郎

カラー版日本文学全集　30

1968©

昭和四十三年四月二十日　初版印刷
昭和四十三年四月二十五日　初版発行

定価　七五〇円

著　者　石坂洋次郎
発行者　河出朋久
印刷者　草刈親雄
装幀者　亀倉雄策

本文印刷　中央精版印刷株式会社
口絵印刷　凸版印刷株式会社
製　本　加藤製本株式会社
製　函　加藤製函印刷株式会社
本文用紙　本州製紙株式会社
クロース　日本クロス工業株式会社

発行所　株式会社　河出書房
東京都千代田区神田小川町三丁目六番地
電話　東京(292)三七一一(大代表)　振替　東京一〇八〇二

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

石坂洋次郎

若い人……五

海を見に行く……三一七

草を刈る娘……三二九

霧の中の少女……三四五

注釈　保昌正夫　三五九

年譜　山本容朗　三七五

解説　小松伸六　三八五

巻頭写真　榊原和夫

色刷挿画　小磯良平

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

石坂洋次郎

若い人*

一

間崎が勤めている女学校*は、米国系のキリスト教会で経営している、自由博愛主義標榜のミッション・スクール*であるが、基金が豊かであることと、創設以来の学長であるミス・ケートの磊落な気象とのおかげで、宗教学校にありがちなかたよった冷たい空気もなければ、それが崩れてルーズな下卑た気風に堕することもなく、五百余人の発育ざかりの女生徒たちは、やはりミス・ケートの考案になる簡素な通学服を短く着込んで、芝生と花壇の多い学園の生活をのびのびと楽しんでいるようにみえた。

ミス・ケートは北米モンタナ州の鉱山街ビュートの産、本年五十六歳、長い握り柄のついた鼻眼鏡を首につるし、小丘のように盛り上がった胸の上に小手*を組み合わせたような腕組みをつくって、始業前、昼休み、放課後の三回、学校の内外を隈なく巡視するほかは、大抵学長室に納まって読書や事務に専念している。毎月曜の第一時限に会堂で全校生徒に修身講話をするのがきまったお役目で、そのほか、月に一ぺんぐらいの割合で各学年に臨時の時間を設けさせ、思索や読書や――規律正しい日常生活の間に蓄積された感想を、美しい流暢な日本語で生徒の胸に伝達する。間崎も一度自分の受け持っている四年B組の臨時授業を参観させてもらったことがあるが、信念の是非は別問題として、話したい内心の要求があって教壇に立つのだから、熱意のこもった立派な修身授業であった。人を威圧する風貌、一抹の暗影もない健康な精神、それらに適度なうるおいを与える深い教養、これがやわらかい感受性をもつ生徒たちをひきつけ、有形無形に学校の気風をつくり上げて行く大きな底力となっていることは、無神論者の間崎といえど日頃敬服しているところであった。

ミス・ケートの訓育方針は、具体的には「少い規則を確実に守らせる」ということで、すなわち、時間、服装、宗教上の儀式、この三項目については特に厳格な取り締りを設けてその徹底を期し、したがって生徒も小気味いいほどそれらの訓練を経ていたが、その一方、学校維持費の大半を外国から仰いでいる強みがあるので、監督官庁からときどき指図される訓育施設に関する告達は大抵握りつぶしにして、生徒に自由な空気を呼吸させるように計っていた。

部下の職員に要求するところも、教授法や学級管理法などの形式ばった項目は口にも上せず、徹頭徹尾、生徒を個別に理解せよということに重点をおき、彼女自身、わずかな臨時授業に出席するだけで、全校生徒の顔と名前をくっつけてよく記憶している点では、毎日授業に出る職員の誰もが及ばないほどであった。

間崎はミス・ケートの信念を教育的に正しいものと思った。個性助長とか個別指導とかいう概念は教育界の流行語となっていたが、それをほんとに生かして行くためには百の議論よりも一の信念を必要とする。ミス・ケートにはそれがあった。もちろん、学校は多数を教育する機関である以上、個性尊重の立場に溺れて、生々しい性格の林の中に踏み迷い、全体としての正しい方向を見失うような結果に対しては警戒をしなければならないが、多すぎる生徒と少なすぎる職員との比率は、実際的にはそんな危険があり得ないことを明らかに示していた。

間崎は自分の勤めに喜びを感じた。赴任当初は、年頃の女生徒に接するのが面はゆくてならなかったが、二年余も経った今日では、自分の知識や感情を適度にパラフレーズして、繊細な態度をもつ少女たちの精神を明るい淡泊な色調に塗り上げていくことに、静かな愉悦を感

ずるほどのゆとりを持つことが出来た。

間崎は自分が若い男性であるゆえに無条件に生徒たちから好意を寄せられていることを知っていたが、それを濫用し、それに溺れることさえ慎めば、与えられたハンディキャップは女生徒を指導する上に得がたい天与の一資格であることを純粋に信じていた。素朴的な性の牽引は父と娘の関係においてさえ白極光のように美しい。溺れることとともに、人生をはなやかな曲線で執縛するこの牽引力を反動的に冷却させることをも深く恥じよ。

六月のある金曜日の午後、間崎は、「悪魔の室」と諧謔的に呼ばれている喫煙室にこもって、五年級の作文に朱筆を加えていた。それは天井ばかりがむやみに高い一間半に二間の穴蔵を思わせるような室で、中央に古びた長テーブル、それを囲む四、五脚の椅子のほかには花も額もない殺風景な場所だった。

南向きの窓からさしこむ陽はテーブルの面を半分だけ明るく照らしていた。使用中は、煙草の煙りが廊下に流れ出るのを防ぐためにドアの開放を厳禁してあるので、ただでさえ窮屈な室の中は蒸されるような暑さだった。生徒たちは正午から郊外散歩に出かけて留守だった。校舎の中は森閑とひそまって、裏の松林で鳴く油蟬が、濁った余韻のない響きを、乾燥した空中に、濁音のベルトのように吐き出していた。

間崎は、じっとり汗ばんでやけに煙草を吸いながら、一枚一枚、味気なく仕事を片づけていった。同一課題の未熟な文章を百五十名分も調べ上げなければならないのだから、一般に作文という学科は教師の側にはあまり歓迎されないものになっているが、間崎の経験によると、この学科は、教授者の課題の選び方および課題解説の成功不成功によって、その時々の成績の水準が著しく変動し、よく出来た場合には他の学科にみられない潑剌とした面白味を感得することが出来る。なんというか、みずみずしい感情思索の万華鏡を覗くといったような楽しい満ち足りた気持なのだ。その反対もひどいが——。

間崎は何回目かの苦しい欠伸を洩らして、とうとうペンを捨てた。そして、疲れた涙の滲んだ眼を、たった一輪だけ窓の高さにヒョロ長く伸びた真紅の牡丹に注いで、自分の肉体と精神を漠然と憎悪する感情の中に沈んでいた。甲の評点を与えられる文章が今まで読んだ分には一編も出てこない。課題は「雨が降る日の文章」というのだった。ジトジト降りつづく長雨は私たちの魂にカビを生ぜしめる、夏の夕立は心の沐浴だ、朝の雨、夜の雨、子供の眼からあふれ出る涙の雨、読んで雨の音を遠くなつかしく耳の底に蘇らせられる文章、雨をインクにして書いた文章……と丁寧にこちらのねらいどころを説明しておいたのに、みんなほんとの雨降りの日を書いてしまった。妹と喧嘩した子、母に手伝ってお萩をこしらえた子、「主婦の友」を読んだ子、窓にもたれて讃美歌二百十六番を唄った子——。責めはこちらにもあるが、要するに主題を把握する力がなかったのだ。辛抱して五、六編も読みつづけていくと、そのどれかに必ずあの「雨が降ります雨が降る、あそびに行きたし傘はなし……」という白秋の童謡が引用されてあるのには苦笑するほかない。五年生じゃないか。

間崎は仕事をきり上げてピアノを弾きに行こうと思ったが、疲れた時のぐずぐずした気持にひきずられて、結局またペンを拾い上げた。今度はたくさんの中からふだんに立派な文章を書く生徒のだけを選んで読むことにした。いつもはこんな仕事のやり方を自分に禁じてあるのだが——。結果は同じことだった。誇張した形容、浮き上がった叙述、こうなると巧詐は拙誠にしかずだ。間崎は最後に、その名前を思い出すとともに棘のようなものを胸に感じる一人の生徒の文章を読んで、骨が折れるこの仕事をお了いにしようと考えた。五年B組、江波恵子。

雨が降る日の文章——。私にだけ書けそうな気のする文題だ。考

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

えることも読み返すこともいらない。私は黙って私の心にフツフツ浮き上がってくる水泡のようなものを紙の上に書き現わしさえすればいい。私がこんな文章を書く努めざるチャンピオンであることは、私の幸か不幸かは誰も知らないし、どうでもいいことだ。

私には父がない。*私がこの学校に差し出した戸籍謄本にはハッ私生児・江波恵子と記してある。家事の徳永先生にいつか『私生児って何ですか』とお尋ねしたら、しばらく考えられて『神様の祝福を受けずにこの世に生れ出た子供のことです』と、大変むずかしい、大変簡単なお答えをなされた。徳永先生は私がその祝福に恵まれない身分であることを御存じなかったのかも知れない。もし知っておられたら、ミス・ケートがなさるように人差指で私の顔のまん中をゆびさして『それは貴女のような方です』と答えられたにちがいない。そうすれば私生児って何のことだか私にもハッキリ納得できたのではないかしら。

キリストには父がない。マリヤは聖霊に感じておはらみになった。けれども私の母は……。母は若い時からたくさんの男のお友達にたよって一家の生計を支えてきた。私の父と呼ばれるはずの人もそのお友達の一人にちがいない。私の生命が、私の父である人が私の母を侮辱することによってこの世に送り出されたものであるとしても、私は神様を父にもつよりは人間の父をもつことを欲する。罪なき者石にてこの女をうて。*私ほど母を愛し私ほど母を憎む者はこの世にいない。母はそのことを知っている。母は今も美しい。けれども年をとって身体も顔も肥ってきた。愛か憎しみか、私がもつような生々しい感情の鞭に打たれなければ、母はもうどうして生きていけばいいのかわからないほどに弱くなっている。

『お母様は幸福だったことがあるの』

『わからない、何が幸福で何が不幸なのかお母様には考える力がなくなったの。お母様はお前がそばにいてくれなければこのままぼうっとして気違いになるんじゃないかと思うわ。朝から晩まで誰にもわからない歌をうたっているようなおとなしい気違いにね。……そしたらお前はどうなるだろうね』

お酒を飲んでいた母はすぐに興奮して泣き出した。そして、一年に一遍遊びにくる外国汽船のキャプテンからもらった古い葡萄酒をもち出して私に飲ませてくれた。私がお酒のうま味をほんとに知ってることを母は気がつかないのだ。

『お母様がそんなになったら――私だってお母様みたいに独立で働いてお母様を大切に養ってあげるわ。お母様がお祖父様にそうしてあげたように……』

私はその言葉の反応を痛いような気持で母の顔から盗みとろうとした。ああ、だけど、母はほんとに弱りきっている。

『そうねえ、お前はお母様思いだから、私が唄きちがいになってもきっと親切に私の面倒みてくれるだろう。おつくりをすればお前だって十人並みの美人だし結構一人で立って行けるよ、女が独立で働くのをかれこれ悪く言うのは世間の奥様たちのひがみだと思うよ。ねえ、だけどお前は私みたいに肥らないように気をつけたがいい。梯子の上り下りが苦しいし、ちょっとの物事に驚いて胸がドキンドキンするからね。田村さんの奥様は毎朝冷水摩擦と体操をなさるんだとさ』

それが母の答えだった。私はまだまだ夢みる女にすぎないらしい。それから、母も私もだんまりでお酒を飲んだ。暗い海から吹いてくる潮風が濡れタオルのように顔のほてりを冷やしてくれた。一匹の黄色い蛾が黒いテーブルの面にじっとへばりついていた。母も私も気にかかって、見まいとするほどその無気味な生物に視線をひきつけられた。まだ見ぬ父のことが錐でつかれるように苦しく考えられてならない。

『お母様、女の幸福って男の方からでないといただくことが出来な

いものなの。女一人だけの幸福って世の中にはないものなのかしら……？　ほんとのことを教えてね』

『お前はときどき恐ろしい大人になるのね。学問したおかげだよ、きっと。お母様にはお前のたずねることがわからないの。世間には私ほど男のお友達をたくさんもった人もないだろうし、また私ほどいつも一人ぼっちの女だった人もないだろうよ。そのくせ何が幸福で何が不幸だかをちっとも知らずに暮してしまった私なの。ずっと昔に、思い出せないの、夢だったかも知れないんだよ、お母様にも幸福らしいものが近づいて来たことがあったんだけど、何だかその背中合わせに血を流すような恐ろしいものが隠れていそうな気がして、臆病なお母様は尻込みしてしまったの。後になってからも悔む心なんか起らなかった。ただもう、ああ恐ろしかった、よかったと思っただけなの。私はきっとそのころから肥り出したに相違ない。

お前の学校の先生がおっしゃるようにもし天国というものがあって、そこで神様が「お前は生きていた時に何をしていた女だ」とたずねられたら「私はたくさんの男のお友達に親切にしてあげました。私は誰をも欺きませんでした。一人のために一人をおとし入れるような罪深い行ないはいたしませんでした。出来ない約束はどなたにもしたことがございません。私はみな様に公平に親切をつくしました。そうすることが私の生れつきに協っていたのでございます。だからどなたも私のために争ったり私のために不幸に陥った方はございません」そう言って答えようと思うの。その通りなんだからね。だけどたった一つ神様に叱られるんじゃないかと思うことがあるの。それはね、ときどき一人ぼっちでお室にいるとわけもなしに泣き出してしまうことがあるのよ。なぜ泣くんだか、泣くわけなんか少しもないのに涙がとめどなしにあふれてきて、しまいには声をたてて泣き出さずにいられなくなるの。身体がこんなに慄えてね。どうしようもない。だけど理由もなしに泣くなんてきっといけないことだと思うわ。ねえ、お前の考えはどう？　なんだかお母様には、お母様が生れない前にお母様が大人になってから泣かずにいられなくなるような原因がつくられていたような気がするの。そんなことなら誰にもわかりゃしない。ねえ、お母様はいけない女――？』

『知らない。……お母様好きよ』

それが母の姿だった。感覚と理性を白濁した血の流れの中に喪失してしまった原始の女。哀れな母。憎い母。私は女学校の二年生になるまで母に抱かれて寝た。母の温かい手が私のお尻を撫でまわした。母が唇を噛んで泣くのも眠ったふりで知っていた。私の知らない理由で母が泣かなければならないということがどんなに口惜しく悲しかったかを私は今も忘れない。私は母の悲しみの彼方にぼんやり『男』を考えた。今も変らない。けれどもまた母と抱き合っていろいろなお話をするのはこの上ない私たちだけの楽しみでもあった。ある夜の寝物語に、私は母から女の身体の秘密についてきかされた。眠れなかった。涙が出た。けれども翌朝までには私は女に生れたことに深い意地悪な喜びを感じていた。私はこの喜びを誰にも気どられまいと自分に誓った。私がそうした女であることをハッキリ自覚した時、女に生れたことの喜びが一層深刻なものになった……。

『お前の指、すっかりもう一人前の女だね。お母様の指環そっくりお前に上げよう。きっとよくうつるよ。……お母様は自分が嫌いじゃない。ないけどお前はお母様とちがっているほうがいい。私たちがこんなに仲好しでいられるのも、私たちの気立てがひどくちがっているからだと思うの。もしお前がお母様に似てくればお母様はもういらないお母様になるわけだから、お室をきれいに飾って、お化粧もして、静かに死んでいくわ、ヴェロナール*のんで。お前の腕の中に抱いてもらって……』

『ええ、止めやしない。そんな日、だけどくるかしら？　来ても来なくても私たち後悔なんかしないと思うけど。……お母様』
『はい』
『好きなの』
『お前お母様の姉さんみたいだね、自分でそんな気がしない？』
『するわ』
うつろに答えた。母は私の指を幾度も唇に当てた。
母にたった一べん訪れた幸福――それが私の父だった、なんて考える権利は私にない。そんな理想主義は三文小説のハッピー・エンドにしか向かない。世間の物事はその逆をいく。私の暗い生き甲斐をそこに見出だされるのだ。私は男を知りたい。その男を通して私の父を感じたい。父の肌を、父の血の匂いを、父の口臭を、父の欲情を――そうすれば私は神の祝福に恵まれない一人の私生児がなぜこの世に生れ出たかを正しく知ることが出来るだろう。
母はテーブルにうち伏してうたた寝している。慢性疲労でこのごろは他愛なく眠る。私は窓縁に椅子をよせてひたすらに暗い夜の海を眺めた。海鳴りをきいた。あの音の中に一切の秘密がかくされていそうな気がする。父よ、現われ出でよ！
結論にきた。気どりやの私は、真理探求に血を流す一使徒としての私を考える。私が処女でなくなる黒い一線がひかれる日は案外近いのかも知れない。私の名は、ハツ私生児・江波恵子！
先生、私のわがままなデッサンです。少しはずかしいんですけど、でも書きたかったものですから……。
原稿紙五枚にワクを無視した達筆な走り書きで認めてあった。間崎は烈しい衝動に打たれた。彼は彼だけに示されたかくも生々しい心の記憶を、女はもちろん男の友人からさえ与えられたことがなかった。お下げ髪、水兵服――そのポケットにチョコレートをしのばせた小娘の中にこんな生活があろうとは！　間崎は二度繰り返して読んでから、刺激された感情の方向に彼の「評」を走り書きした。
「私が要求したものは雨が降る日の文章だったのに、貴女は嵐の日を書き上げた。それはすでに書かれてしまったのだ。私は私が教師であるだけの理由で、かくも苦悩に満たされた懺悔を私の生徒に強いる権利があろうとは思わない。いや、これは私の外交辞令だ。ありのままに言うと貴女は豚に真珠を与えたことになろう。私の役目は生徒という概念を指導することにあって、彼女らの個々の魂には関わりがない。結局ない。私は白い手の鋳物師だ、型つくりだ、それ以外のものであってはならない。この薄弱な犬儒主義*は、私もまた若いという理由でともかくも許容されなければならぬ。でないと私は貴女や彼女や彼女ダッシュ*の息づまるような心の花園の匂いの中に窒息を余儀なくせしめられるであろうから。それは私と貴女と、私と彼女との情死を意味する。私たちはミス・ケートの心臓を擁護するためにも、当分、臆病者の名に甘んじようではないか。私は多くを言いすぎた。
『吠ゆる犬は強からず』
以下二、三の評を書く。江波恵子は自分を強いと信じている弱い少女だ。彼女の眼はかつて多くの封建婦人が冒されていたつつましやかな色盲症を患っている。それは、微細な陰影をとらえるには敏感だが、肝腎の光りはことごとく逸してしまう哀れな不具の網膜だ。現実とは自己の対立的存在ではない。自己の積極的意力が時間と空間に働きかけた場合にのみ我々の現実は誕生するものであり、江波がみたものは遠い昔に死滅した月世界の観念的な現実にすぎぬ。それがいかに美しかろうと、その美は結局博物館に保管さるべきものなのだ。
江波の第二の誤謬は自分の幸不幸をこの冷却した客観世界に依拠

せしめていることにある。それは古風な運命論であり、君はその中で自らを瀕死の白鳥に喩えて息も絶えだえな踊りを踊ろうとしている。与えられる号令は回れ右！　だ。そして君は一兵卒の四角い素朴な意識をもって君の人生を踏みなおさなければならぬ。妄評多罪」

間崎は一気にその評文を書いてしまった後、寂しい濁った気持にさせられた。人中で調子に乗ってしゃべり過ぎたり、嘘をついたりした時に感じる渋い舌ざわりな気持。多分彼は評文の中に空疎な美辞麗句を織り込んだものに相違ない。だが、いつの場合でも、そんなふうの虚偽*は、その時偶然に語られたものではなく、彼の心にそれを醸す不純な渣滓が沈澱している事実を裏書きするものだから、自分の未熟を鞭うつとともにその渣滓を根絶やしする意味で、一度口外した言葉はなるべく引っ込めないことにきめていた。今度も彼は衒気に満ちた彼の即興的な批評を一字も訂正しまいと意固地に決心した。

――間崎は赴任後まもなく江波恵子の名を知った。職員室の話題に上る江波は、ひどいわがまま者で、よく学用品を忘れる、ぜいたくな所持品をもってくる、寄宿生であるにもかかわらず遅刻、早引きが多い、教師に理屈を言う、そのくせ頭はすばらしくいい、といったふうな、教師の側からは最も扱いがたい生徒の一人であった。間崎はそうした噂を聞き、またときどき訓育係の先生に呼び出されてお叱言を喰っている、大柄な、美貌の本人を見知ってからも、特別な関心を持つことはなかったが、ふとした機会で江波との間に個人的な交渉が生じて以来、疲れた時、寂しい時、江波の姿が雲のように心をかげらすのに気づいて顔を赧くすることがしばしばあった。恋愛だとは思わない。絵でも文学でも人間でも、頽廃的なものに心を引かれる自分の傾向を間崎は平素から極力警戒していたし、江波に対する関心も、他の生徒にみられない成熟した一つの性格に対する興味にすぎないものだと思っていた。

七月半ばのある日、彼は時間が空いていたので、雑誌をもって裏山へ寝ころびに行った。熊笹の間の小径を通っていつもの丘に上り、一本松の下の窪地に腰を下ろして、まぶしく光る海を眺め下ろしていると、ふと間近かで口笛の音が聞えた。ふり向くと彼から三間と離れてない別の窪地に、江波恵子が、両手を頭の下にあてて、あけひろげな形でのびのびと寝ころんでいた。胸に赤い表紙の本をのせ、眼をつぶって口笛を吹いている。間崎は驚くとともに、江波の地面にまかせきったような姿態に反射的な恥ずかしさを覚えた。彼は近づいて声をかけた。

「どうしたんだ、江波さん」

「とうとうみつかったわ。足音が聞えた時、先生かも知れないと思いましたの」

江波は起き上がって彼の顔を見上げ、悪戯を企てた子供のように面白そうに笑った。こうして見るとほんの無邪気な少女の顔でしかない。

「頭が痛いからこの時間だけ先生に休ませていただきましたの」

「君はわがままが通っていいんだね。何の本だ……」

間崎はぶっきら棒に言って江波のそばに腰を下ろした。空も海も晴れ渡って誰とでも仲よく出来るすがすがしい気持だった。本はフランスの訳詩集だった。

「先生お上がりになる……」

ポケットから銀紙に包んだチョコレートを掴み出した。

「いろんなものを持ってるんだな。いただこう」

ゆっくり包み紙をむいて黒い塊りを口に入れた。同じ甘さが二人の舌の上で溶けるのが感じられた。間崎は豊かに肉づいた白い艶のいい横顔をこだわりなくじっと眺め下ろした。チョコレートを含んでポッンとふくれた頬だけを見ていても、眺め飽きない清らかな美しさがあ

ふれ出てくる。江波は、片方の耳に重くかぶさった髪の束を、グイと頭を強く振って払いのけ、それとともに間崎の顔を無邪気に眺め返した。自然な微笑が眼の片隅から湧いた。

「君はこうしていると素直ないい人なんだがね。何だってときどきあんな桁はずれなことをやって職員室に呼び出されるんだかなあ」

「私にもわからないんです。おとなしい私と悪い心をもった私とが身体の中に別々に住んでいて、私はそのどちらかの奴隷にさせられてしまうんです。おとなしいほうの私だってほんとの私じゃないような気がするんです。私の顔、ウンと綺麗に見える時と醜い恐ろしい顔に見える時とあるってお友達が言います。どっちの顔も、私、自分の意志でつくることは出来ないんですけど。

いつかミス・ケートが倫理のお話の中でお互いに喰い合う二匹の蛇はしまいにはどうなるかってお尋ねになりましたけど、私自分のことを考えると、その無気味な喩え話が思い出されてなりません。人間にすると、それは自分が生きて行くために自分の命を少しずつ食べて行くっていうことになるんでしょう」

他人のことでもあるように屈託のない顔で語っていたが、やわらかい言葉の底を一と筋の黒い糸のようなものがピーンと貫いているのが感じられた。間崎は静かに湧き上がる興奮を抑えつけて答えた。

「君の考え方は間違ってないと思う。我々の生命は原始の土からつくられる。ところで人間だけがもっている最高の精神が、その土の匂いにまみれた生命を少しずつ喰い減らして行く、それが各個人の人生になるんだと思う」

「――最高の精神は何から生れるんでしょう」

「それは土でつくられた荒削りな生命の中から」

「おかしいわ。そんな矛盾した関係、考えられないじゃありませんか」

「考えるんじゃないんだ、それが事実であることを正しく認めることが必要なんだ」

「認めてもいいわ。だけどもし、私が普通の人と反対に、その泥まみれな生命のほうが最高の精神を喰い物にして生きて行く人間だったら――。自分が生んだ赤ン坊を食べなきゃ生きていかれない母親だったら――。何だか恐ろしいわ」

間崎は笑っている江波の顔から自分の眼玉の中に何か飛びこんだような気がした。

「そういう人は不幸だと言うより仕方がない」

「じゃ、私不幸だわ」

その瞬間、突然なおかしさがこみ上げて、二人とも声を上げて笑い出した。

漁船を曳航する発動機船の爆音が、口の中にふくんだようなやわらかい連続音を港の眠った空気の中に響かせた。一つ一つの音が小さい輪になって空に吹き上げられ、それが緑色の棒を寝かせたような半島の突端までユラユラと波紋をひろげて、うすれて、消える。眼を細めて海面を少しずつたどって行くと、太陽の光りで白くギラギラ光っている沖に近い区域を一、二寸はずれたあたりに、五、六匹の虫が行列したような漁船の一群が発見された。混み入った地図の中から自分のさがす小都会を発見したような、ただそれだけでわけもなしに嬉しい気持にさせられることだった。それらの漁船には赤銅色の皮膚をした漁師たちがのっており、漁師たちのおかみさんや子供らは浜辺を歩いており、彼らは愛したり喧嘩したり、死んだり生れたり――そんなふうに空想をひろげて行くと、日光と緑の氾濫した平明な港の全景が、著しく汎神論的な気分に富んだ一枚の厚ぼったい画面にみえるのであった。

崖下から微風が吹き上げて来た。少女の清らかな匂いが薄い網のように間崎の顔を包んだ。

「君が女学生だなんておかしなことに思われる」

「そうかしら。先生だけがわざとそう思うんじゃなくって？　それと

も私が先生だけにそう見せかけるのかしら？　私は、いえ私たちはみんな先生が好きなんです。こないだの談話会の時間に嶋田先生がお休みになったので、私たちだけで大変な談話会をやってしまったの。田村さんが議長で、好きな先生の無記名投票をやったんです。先生が一番、二番が橋本先生、三番がミス・ケート。私、誰に投票したか先生にわかる？」

「僕に。だって君は今先生好きだって言ったもの」

「ちがいました。私、橋本先生と書きました。先生が一番になることわかってましたから書きたくなかったんです。じゃなぜ私が橋本先生に投票したのかわかりますか」

「なんだ、僕のほうが生徒にされちまったな。――わからんね」

間崎は自分の表情を読みわけようとする江波の視線を、こちらも眼の光りを強くして、途中で受け止めようとしたが、その前に赧くなってしまった。

「先生わかってらっしゃるんだわ。でも、私言いますわ。私、先生が橋本先生をお好きなことわかってましたから先生のために橋本先生に投票したんです」

「好きだって――。別に嫌う理由がないじゃないか。生徒の間にそんな噂がたってるのかね」

「噂なんかありません。けれども先生と橋本先生とが現在親密にしておられなくともお互いにお好きでいらっしゃるんだということをはっきり感じてる生徒が二、三人はいると思います。ほんと過ぎることは口へ出すのが恐ろしいような気がして決して噂になんかならないものですわ」

「誰だね、その二、三人というのは」

間崎の語気は荒かった。

「先生を人いちばいに好きな二、三の生徒たち」

「不愉快だなあ。僕は昔っから自分の妹であっても、そこらのおかみさんくさい頭の働かせ方は大嫌いなんだがな」

「ごめんなさい」

江波は黒い線で中断されたようなチグハグな笑いを間崎の顔に浴びせかけて、海に向いた。そしてかすれた口笛の真似を始めた。無邪気とも太々しいとも、そのどちらかにきめようとすればかえってそれが嘘になる紙一重の危険なスタイルをやすやすと自分のものにしている不思議な少女だった。どんな大人の言葉を語ってもしっくり身についている代り、自分の立場というものを恐ろしいほどに持たない、したがって彼女の語る言葉、言葉、言葉は悪霊のように黒い翼をはためかせて大気の中を浮游してやがて死滅する。

間崎を焦立たせた話題の橋本先生というのは、彼と同期に赴任した女子大出の若い女教員で、地歴を担当し、現在舎監を勤めていたが、洗練された容姿と進歩的な思想とで、上級生からことに信頼をかけられている気鋭の人だった。間崎も他の同僚に対する場合とは異った本質的な好意を遠くから寄せていたが、職員室風な世間話以外には私的な会話をまじえたことがなく、またそうした機会をもちたいと望むこともなかった。

ある日曜日、朝からどしゃぶりの雨だった。宿直に当っていた間崎は、室の中が鬱陶しいので、窓際に机をもち出して都会に住んでいる友達に用事のない長い手紙を認めていた。そこへ十一時の郵便配達が来た。宿直員は、その日に受けた郵便物を種別分けに日誌に記載し、名宛ての先生たちの机上にそれを配布しておくだけの責務がある。間崎が受けとった一と抱えの郵便物の中に、橋本スミ子先生宛ての小包みがまじっていた。包み紙が雨に濡れて破け、中身の本の表題がすぐ読めるようになっていた。社会主義に関する秘密出版物らしかった。間崎は、そんな本を読む友人を二、三人もっていたから格別驚きはしなかったが、学校宛てに送らせるのはいけないと思って、その小包みを新聞紙に包み、紐でしばり、中に「小生が宿直で、小生が受けとり

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com